

「東山」を視点にして、身近な地域₍₁₎の教材化に迫る

— 故郷意識を育てる地域学習 —

波 巖（教育学科・教授）

Developing Teaching Materials by Focusing on the Hometown
around “Higashiyama”

Iwao Nami

Abstract

Learning ability has been newly defined in the recent School Education Law and the Course of Study Guidelines by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Based on “intrinsically motivated attitudes,” students should be engaged in problem-solving activities with the steps “acquisition - application - investigation.” In problem-solving activities, abilities such as “thinking skills, judgment skills, and expressive skills” are practiced and cultivated.

Given these guidelines, this paper attempts to develop teaching materials about Ofuna, where the author's school is located, in the ultimate hope of promoting “sustainable development of the global environment,” which is a critical issue worldwide.

Hometowns are where we feel we belong, and thus fostering a hometown-caring mentality with regards to Ofuna can become a core of learning.

Studies about Ofuna as a hometown have rarely been seen. By defining and using Ofuna as a hometown for students, this paper explores the basics of hometown learning through problem-solving activities.

Keywords: hometown-caring mentality, global environment, teaching-material development, Higashiyama, shrine

キーワード：故郷意識、地球環境、教材化、東山、神社

はじめに

本学に隣接して「東山庭園」があり、その隣に「東山」がある。また、本学には、2つのゲートがあり、その1つを「東山ゲート」という。

ところで、本学では、学生もそして教職員も「東山」は「東山」であり、それは自明のことであって、この「東山」に対しては、これまで、ほとんど疑問を差し挟むことはなかったように思う。

しかし、よく考えてみると、いくつかの疑問が生ずる。

まず第一は、この山をなぜ「東山」というのかという疑問である。

第二には、「東山ゲート」は、校舎の南側にあるが、なぜ「南ゲート」と呼ばないのかという疑問である。ちなみに、校舎の北側にあるゲートは、「北ゲート」とは呼ばずに「サブゲート」と

いう。つまり、「東山ゲート」がメインゲートであることを暗に意味する。

第一の問題である「東山」という呼称について考えてみたい。

これについては、正誤は別として、とりあえず答えは出せそうである。つまり、この山は、大学から見て「東」の方向にある。大学の東にあるから「東山」という答えである。

さて、大学を基準にしたとき、「東山」が「東」にあることが分かったと、学生も含めて、私たちの暮らしに何か便利なのがあるであろうか。まず、北、南、西の四方位がはっきりする。当然、八方位もはっきりする。方位が分かると、思いがけない利点が生ずる。

6月10日の梅雨の時期に、実際にあった出来事を簡潔に述べたい。

この日午前中は、窓の外に青空が広がっていた。ところが、午後から、急に黒い雨雲が空いっぱいに広がった。しかし、よく見ると、15時過ぎには大船観音をバックにして、西の空のわずかな空間ではあるが、横に青色の空が広がっている。西の空が晴れているということは、やがて雨雲が去るということでもある。事実、5講時の授業が始まる頃(16:00)には、青空が広がり雨雲は流れ去った。学生たちは、しばし時間を忘れ、大船の空を様々な思いを持って眺めていた。

こうした自然現象は、日本のような中緯度の温帯域では、雲が偏西風に運ばれて西から東へと移り変わっていくことを考えると特別なことではない。ちなみに、気象庁では、気象衛星ひまわりからの1時間毎の雲の変化(全球)及び30分毎の雲の変化(北半球)が示され、日本では、天気図が西から東へと移り変わっていく映像が配信されている。

さて、こうした事態に出会ったとき、人の心の中に刻み込まれる「東山」や「鎌倉女子大学」、そして「大船」とはどのような空間であろうか。それは、他では決して味わうことのできない鮮烈なイメージを伴った「我が故郷(ふるさと)東山」(以下本稿では「故郷」を「ふるさと」と読む)であり、「我が故郷鎌倉女子大学」、そして「我が

故郷大船」であろう。

「故郷」と似たような用語に「地域」があるが、「我が地域東山」にも「我が地域鎌倉女子大学」にも若干違和感がある。「故郷」と対比して使われる場合の「地域」という用語は、知的であるとともに分析的であり、一人一人の心の中に刻み込まれる鮮烈なイメージを伴わない。

ところで、現在、我が国の学習指導要領では、小・中・高ともに「故郷」及び「郷土」という用語は使用せず、「地域」という用語で統一している。具体的には、「地域社会の一員としての自覚」、「地域に対する誇りと愛情」、「地域的特色をとらえる」等と記述されている⁽²⁾。

これは、「故郷」といったときには様々な人々の思い(イメージ、感情、感覚等)が含まれてくるのに対し、「地域」といったときには分析、関連、構造等の知的なウエイトが大きいと思われる。もちろん、知的な活動は、地域の一員としての自覚や誇り、愛情なしには存在し得ない。「地域」を愛するからこそ、「地域」を深く知ろうとする。そう考えると、「地域」という概念は、「故郷」という概念を包み込むものととらえた方が、より積極的な意味を持つのではないかと考える。筆者は、今こそ、もっと「(我が)故郷意識」を子どもに持たせる「身近な地域」学習をつくるべきだという立場に立つ。なぜなら、「(我が)故郷東山」の宝である豊かな緑を守ることが、昆虫や小動物を育て、それを餌とする多くの野鳥を飛来させ、「トビやコジュケイ等の鳥類、タイワンリス」⁽³⁾の営巣につながっていると考えるからである。ひいては、この緑が二酸化炭素の削減にも一役買っているのではないかと考える。「故郷意識を核にした身近な地域の学習」の展開こそ、環境を守るという現代的な課題に応える学びになると考える。

現在、各地で、蛍の里や里山の復活、棚田や用水の復活などが試みられている。もちろん、地域の人々の熱心なボランティア活動に支えられていることがほとんどである。こうした他を持って代え難しともいえるかけがえのない個性的な地域活動が、大きくは日本の環境を守り、地球環境を守

ることに貢献するのではないかと考える。他を持って代え難い地域とは、これこそが人々の思いの込められた「我が故郷」そのものであり、こうした意識の広がりこそが、待ったなしの地球環境を守るというグローバルな実践に直結していくと考える。

本稿では、「故郷に対する様々な生身の人々の思い」を、地域を育てる「故郷意識」とし、そうした意識をどのようにしたら育むことができるか、その指導の仕方を考えてみたい。

1 子どもにとっての「地域」と「故郷」

(1) 「故郷意識」と「地域」

「兎追いしかの山、／小鮒釣りしかの川、／夢は今もめぐりて、／忘れがたき故郷」という歌がある。日本人なら、おそらく誰もが共感し、「故郷」のイメージを共有できる歌である。

故郷というのは、どこかの地域と比べて、優れているとか劣っているというものではない。野山で兎を追い、川で小鮒を釣ったという幼き日の体験は、他と比べることのできない何人も否定しようのない自分だけの思い出である。故郷には、そこに自生する一木一草にも思いがあり、その人だけが持つ絶対的な空間（主体性）がある。その空間は、決して忘れることのできない懐かしい空間（土着性）でもある。

この故郷意識を極限まで突き詰めたのが、国連の次のメッセージである。

「この先どうなるかわからないまま見知らぬ土地で暮らさなくてはならない、その喪失感と疎外感は計り知れません。故郷を失うことは、自己喪失にもなりうるのです。しかし、こうした苦難にもかかわらず、難民は「故郷」への想いを諦めません。故郷とは、家族や安心感、帰属意識、また自己の存在価値を感じられる場所なのです。様々な苦難の渦中でも、難民たちはこうした希望を持ち続けているということは、私たちに感動を与えます。そこで UNHCR（国際連合難民高等弁務官事務所）は、今年の「世界難民の日」のテーマに「故郷と呼べる所」を選びました。」（「世界難民の日」（World Refugee Day）国連総会決議）

端的にその意味する所を述べるなら、「故郷とは、人間存在の帰着の原点である」（定住性）といえよう。

これに対し、「地域」はどのようにとらえたらいいのであろうか。地域の定義については、「地域とは、地表の一部で、何かある一つのまとまりを持っているところを意味する」「一つのまとまりは、……形式地域と実質地域に分けられ、更に、実質地域は均等地域と結節地域に分けられる」。要するに「地域は知的概念」⁽³⁾ であると共に、論理性、一般性を備えている空間（客体性）なのである。このように考えると、地理学上では、「地表面上にこれが地域だと呼べる実体はないと考えられている」⁽⁴⁾、というもうなずける。換言するなら、地域の持つ「解放性」ともいえる。

逆にいうと、地表面上にこれが地域だと呼べる実体をもつものは「故郷」をおいて他にないのではないか。なぜなら、故郷こそが「他を持って代え難し」ともいえるかけがえのない地域活動が行われている具体的な空間だからである。朝倉隆太郎は、故郷意識を「郷土」という言葉で表現しながら、これを「地域」と対比して、次のように述べる。

「「郷土」の語は古臭いというが、それが有する主体性・土着性・定住性を捨てて、地域の語が有する客体性・解放性・流動性（例、高度経済成長時代）にのみ目を奪われてよいのであろうか」⁽⁵⁾。図に整理すると次のようになる。

<表 1> 「地域」と「故郷」の特性の対比

地 域<論理>	故郷（郷土）<感性>
客体性	主体性
解放性	土着性
流動性	定着性

筆者は、朝倉隆太郎の「郷土学習」を現代的視点から再評価し、「故郷意識を核とした身近な地域の学習」として組織すべきだと考える。

(2) 故郷意識と地球環境保全意識

家族の情、近所の人々との心温まる交流がある

とともに、多様な動物が住み自然にあふれた空間が「故郷」であろう。子どもは、日が落ちるのを忘れて大自然の中で友と群れ、遊びに夢中になる。その体験が、夢にも出てくる「忘れがたき故郷」意識である。自己の存在価値が感じられる場所であると共に、自然との共生の場所でもある。

ところが、高度経済成長は、そんな故郷を破壊してきた。森林を切り開き、川を護岸工事で固め、道路をコンクリートで覆い、高速道路網を建設してきた。河川、湖沼、海は汚染され、若者は大都市へと移住した。それに伴って、人々は故郷を失った。しかし、それでもなお、大都市へ出た若者はじめほとんどの人々の心の中には「故郷意識」が生き続けている。

「故郷」が、UNHCRの言うとおり「人間存在の帰着の原点」であるなら、人間がそれを守り、回復しようとするのはごく自然な行為である。つまり、壊れた自然を回復し、守り育てるのが「故郷意識」でもある。それは、これまで、地域の人々が、大切に守り育ててきたあるがままの自然や社会をあるがままに受け入れ、自らも引き継いでいこうとする意識でもある⁽⁶⁾。

ところで、環境と言っても、もはやそれは、一地域、一国の問題ではあり得なくなっている。中国やモンゴルの黄砂は、朝鮮半島を飛び越え日本に飛来している。北極の氷の融解は全世界の海面水位を高めている。今や、一地域の環境をよくする行動は、地球環境全体の維持保全に関連している。故郷意識は、地球環境を守り育てるともいえよう。

(3) 子どもにとっての故郷と地域

大人にとっての故郷は、かつて、誰と、どこで何をしたかという「過去の空間」である。しかし、子どもにとっての故郷とは、過去ではなく、今、誰と、どこで何をしているかという、鮮明に心の中に刻んでいる「現在進行形の行為」そのものである。それは、進行形の実体験そのものともいえる。

大船に住む子どもにとっての「故郷」は、決して古都鎌倉ではない。大船の地である。彼らは、

活動の大部分の時間を大船でくらし、遊び、学び、人々と語っているからである。そして、やがて大きくなった時、彼らの心に焼き付いた「故郷」は、大船となる。

しかし、「鎌倉は知っていても大船のことはよく知らない」という大人が実に多い。このことは、地域学習が、子どもの心の中に故郷意識を育んでこなかったということでもある。

時として、現代の子どもについて、「ジャンプの匂いはするが、子どもの匂いがしない」と表現されることがある。子どもの匂いとは、太陽や泥、土、草・木、昆虫、そして汗の匂いである。これは、大自然の匂いでもあり、どきどきはらはらしながら体験している時の子どもの匂いである。このような匂いが消えているということは、子どもの心の中に、鮮明に刻まれていなければならないはずの行為（実体験）がなされてこなかったということになる。これでは、書物のうでで鎌倉についての知識はもつことはできても、大船については実感がないという人間が育つのも無理からぬところである。

(4) 学習指導要領のなかの地域学習

現在、小学校社会科学習指導要領では、3・4年生の学習対象を「身近な地域や市」及び「県（都・道・府）」としている。しかし、「地域は知的概念」であるという色彩がぬぐいきれない。つまり、地理的位置、地形、土地利用、産業の概要、主な公共施設などの場所と働き、交通網、都市の位置の習得である。そして、こうした知識を活用して、地域学習の基本的構造が学び取られる。つまり、地域は、「生産（農業、水産業、工業等）→流通・販売（店）→消費（買い物）→廃棄（ごみ）→再利用（ごみ、下水）」の循環で成り立っており、この循環を支えるものとして、安全性（交通事故、火事）、健康性（飲み水）、利便性（交通、通信）、快適性（図書館、公園）などの公共性が取り上げられる。⁽⁷⁾

さらに、こうした現在ある地域を成り立たせている基盤として、地域の歴史（地域の昔、開発）が取り上げられる。※（ ）内は、単元内容のキー

ワードである。

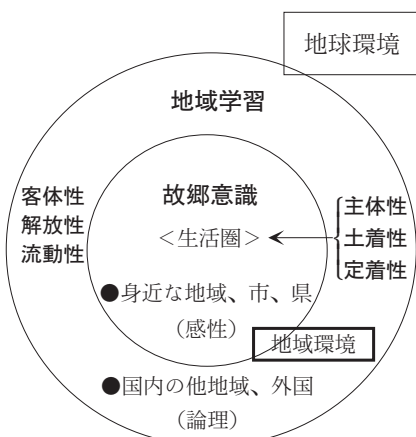
きわめて論理的に地域の学習がなされるよう構成されている。論理的ではあるが、故郷意識がこれで育てられるかという危惧も感ずる。

しかし、一方で、身近な地域には、そこに住む固有名詞を持った生身の人間を登場させるべきだという考え及び実践がたくさんある。どこそこの農家のおじさんであり、工場のお姉さんである。そこでは、学習の中で、子どもたちとの交流が可能であり、人間的な温かい触れあいが可能である。こうした体験は、確実に子どもの心の中に故郷意識を育む。

2 故郷意識を育てる地域学習の具体的視点

(1) 故郷意識と地域学習

故郷意識と地域学習の関係を、下図のように考える。



<図1> 故郷意識を核にした地域学習の構造

ア、地域学習は、故郷意識を育てることを中核としながら展開する。

イ、故郷意識の育成は、子どもの生活圏を学習の主たる対象とする。つまり、身近な地域である。

また、市、県についてもその発展として扱う。

ウ、故郷意識は、知的な論理はもとより、地域の人々の思いなどの感性を重視し、体験的な学習によって育てられる。

エ、故郷意識は、地域環境を維持・発展させる子どもの視点に立った具体的な問題解決活動によって育てられる。

オ、国内の他地域や外国の学習は、「故郷意識を中核とした身近な地域」やその発展としての市、県の学習を基盤としながら、より普遍的かつ論理的に展開する。

カ、小学校高学年以上の学年では、地球規模の地域環境の保全というグローバルな視点に結びつけることができるようカリキュラムの系統性・一貫性を図る。

(2) 故郷意識を育てる手順・ポイント

故郷意識を育てるポイントを以下に整理しておきたい。

ア、地元を教材化すること……大前提

前述のとおり、子どもにとっての故郷とは、過去ではなく、今、子どもたちが鮮明に心の中に刻んでいる「現在進行形の行為（実体験）」そのものである。この実体験が、成長するにつれ「人間存在の帰着の原点」である「故郷意識」を形成する基盤となる。

イ、教師の教材研究の深化……スタート

教師の問題解決活動が子どもの故郷意識を育てる第一歩である。

筆者が大船駅に降り、最初に大学までの道筋を歩いた印象は、まず、大船駅構内のホームの多さであった。また、異常に医療機関が多いということであった。さらに、銀行や商店、美容室も多い。「このまちは、いったい何だろう？」この疑問が第一勘であった。そして、この疑問が、新たな問題を次々と生み、解決の度に問題の質を深める。まちの特徴の発見に導いてくれる大切な道案内である。以下は、第一勘としての疑問・問題群及びその深化・発展としての疑問・問題群である。

○事実の認識としての疑問・問題「何がそうになっているのか」

◆大船駅はホームが多いなあ（びっくり・感性）
いくつあるのだろう？（数量認識）

◆渋谷や新宿とも比べてみよう（比較）

○学びへの転換となる疑問・問題「なぜそうになっているのか」

◆「どうしてかなあ。大船には、なぜホームが多いのだろう？」（問題解決）

・条件思考（分析）・関連思考（構造化＝総合）・因果思考（歴史）

○発展の方向を探る疑問・問題「今後どうすればよいか」「今後どう発展していくのか」

ウ、社会（地域）参加して導く……キーポイント

まず、教師が社会（地域）参加して、教育的意義を確かめる。子どもには、意義を認めたものを活動として取り上げる。そのためには、地元の人との人間関係を深めることが肝要である。社会（地域）参加には、交流、啓発、提案、参画⁽⁸⁾があるが、実態に即した活動を選択する。

エ、教師の問題解決活動を、子どもの問題解決活動に転化するすること……学習活動

故郷意識と地域学習を結ぶのは、問題解決活動である。「故郷意識を育てる地域学習」は、まず、上記イのように、教師の問題解決活動からスタートする。これを、子どもの目になって、子どもの問題解決活動に置き換えることが必要である。

オ、常に子どもの目線で確かめ、子どもの気持ちになって考える。……目線

子どもと共に実際に問題解決の筋道を辿っていくと、予想もしなかった子どもの豊かな発想に出会う。教師は、子どもの目線に立ちつつ、共に問題解決活動に没頭する。子どもの考えや気持ちが分かってくる瞬間である。解決できたときの成就感、幸福感や失敗したときの悔しさは人生の宝物として一生残る。故郷意識の形成である。

カ、常に地域の今と昔を行き来すること……展望

今、自分が「住んでいる」もしくは「活動している」この地域をよりよく理解するためには地域の昔を知らなければならない。そして、昔と今を行ったり来たりしなければ、決して今のこの地域を深く理解することはできない。昔の地域の理解のない「今」は、皮相的である。また、昔を知り、今が理解できれば、地域の将来が展望できる。

キ、昔の痕跡は、必ず今に残っている……学び方

昔の痕跡は消せない。探せば見えてくる。東山も、かつて大学の前にあった離山⁽⁹⁾も、その縁辺を巡ると、小高いところがある。昔の痕跡である。また、その痕跡は、現在の大船の地形図にも残っている。また、古文書とも照合してみたい。

ク、多様な故郷意識と豊かな人生……生き方

子どもは、成長するに従い、様々な土地でこれからの人生を過ごす。父母の転勤や転居、自らの進学、就職、転勤、結婚等により、様々な新天地での生活が重層的に開始される。

本学の多くの学生は、他郷から通学している。しかし、大船という地が、駅と大学を結ぶ単なる一本の通路にしかっていない。実際は、大船の自然、社会、歴史は、他の地域にはない独特の深さと広がりを持つ。この地域に住む人たちの意識も奥深い。こうした他郷から通ってくる大学生にも、大船を第2の故郷とする意識を持たせることはできないだろうか。もちろん、学生にとっては、学びが生活圏の中心である。それと共に、友と学び合い、食事をし、語り合い、遊び、部活をする故郷であり、青春の故郷でもある。「第2の人間存在の帰着の原点」づくりである。第2、第3と多様な故郷を持つ人間が「豊かな人生」を築ける。

以下、東山の教材化を通して、「故郷意識を育てる地域学習」について具体的に考えてみたい。ここでは、対象を中学年の子どもの想定しているが、かなりの部分が本学の大学生にも共通している。

3「東山」を視点にした教材の意義

（1）なぜ、「東山」か

「東山」を教材として取り上げるのには、主に二つの大きなねらいがある。

一つは、東山が、大船地区の「扇の要」の位置を占めていることである。

現在の大船地区の原型は、江戸時代にあると考えてほぼ間違いないと思われる。「現在の大船駅を中心として栄える大船地区は、江戸時代の大船村である。当時の範囲は、東西二十町・南北八町で⁽¹⁰⁾あり、東西に細長い地域であった。「当時は、離山の西側を外耕地、東側を内耕地といい、鎌倉で一番大きい耕地で「大船千石」と呼ばれ、近郷近在の中では一番の石高を誇っていた⁽¹¹⁾」。

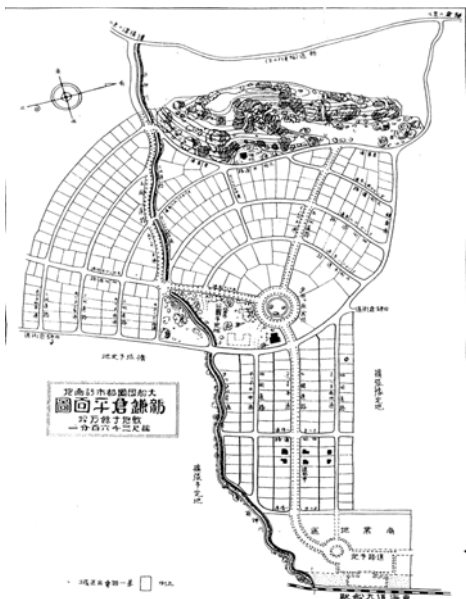
ちなみに、1834（天保5）年には、約927石の石高があり、岩瀬村の約546石などに比べても2倍弱の石高があったことになる⁽¹¹⁾。一面田が広がっ



＜図2＞明治15年「大船村図」参謀本部陸軍部測量図より
 ※左読み表記の旧鎌倉街道、東山、砂押川、外耕地、内耕地、離山の地名は、筆者が加筆・挿入

ている様子は、明治15年「大船村図」＜図2＞からも分かる。＜※東山の地名は、国土地理院作成の地図には出てこないで注意が必要＞

また、この当時砂押川に接していた東山の北側の山頂及び南側のなだらかな丘陵地は、削られてしまって現在は無い。今の東山は、この当時のほぼ3分の1になっている⁽¹²⁾。それにしても、扇子を大きく開いたときの扇の要の部分に東山が当たっていることは、外耕地→内耕地→東山の順に、奥に向かって地名が並んでいることから推測される。

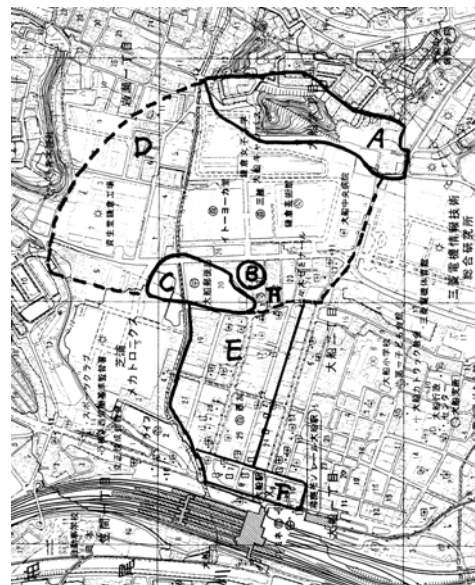


＜図3＞大船田園都市計画図「新鎌倉平面図」
 敷地十余万坪（縮尺：1/3,600 大正11年）

＜図3＞は、＜図2＞「大船村図」から40年後の大正11年の大船田園都市計画図である。この図を見ると、東山を起点としながら内（内耕地）から外（外耕地）へと都市構想が展開している。そして、構想の終点が東海道大船駅となっている。＜図2＞との違いは、内と外を分けていた離山が消滅していることである。尚、扇の要の位置に神社がある例は、全国的に広く見られる。大船の近くは、横浜市の中心地にある日枝神社に見られる。この神社は、吉田新田の扇の要として造られている。

＜図4＞は、現在の大船駅東口周辺の地図に大正11年当時の図面を重ね合わせたものである。東山の北端が砂押川に接し、南端が三菱電機情報技術総合研究所の工場に接していたことが分かる。また、現松竹通り（さつき本通り）を中心とした「さつき区の街路は現在に引き継がれていること」も分かる⁽¹⁴⁾。

東山を取り上げる理由の二つ目は、連続した問題解決活動が展開できるということである。このことについては、以下「4 単元東山の展開」の項で詳しく見ていきたい。



A;東山 B;夕陽丘 C;公園 D;売り出し予定地域
 E;第一回売り出し区域 F;商業地区 山宮神社

＜図4＞「1 万分の1 地形図大船」
 国土地理院⁽¹³⁾ 平成10年10月1日

(2)「東山」を知っていると便利なことは何か？

教材化するということは、その教材が、学ぶものにとって価値があるということである。価値があるということ、長所、メリット、プラス等であり、要するに「便利なこと」である。これについては、「はじめに」の中でも例を挙げて述べた通りである。

平成20年度入学の大学1年生301人に対するアンケート（7月22日、23日、24日、28日に実施）では、以下のような結果が出ている。

役に立つことがある。……86.1%
役に立つことはない。……12.6%
不明……1.3%

大部分の学生が、役に立つことがあると答えている。方位を知ることの意義は大きい。

4 単元「東山」の展開

—故郷意識を育てる身近な地域学習の構想—

この単元は、二つの小単元で展開するよう構想した。一つは、「東山の「東の秘密」」であり、二つは、「山蒼神社は、東山にあったか、離山にあったか」である。

尚、ここでは、初めて社会科に接する3年生の4月の最初の授業を想定した。

(1) 小単元1 東山の「東の秘密」

①方位を知る——学校の裏に「東山」がある。なぜ「東山」と名前が付いたか？

○学校から見て東側にあるから？

3年生の子どもたちは、まだ方位を知らない。そこで、方位磁針を利用して、東山が、東の方向にあることを確認する。ふだん、あまりに身近にありすぎて疑問すら感ずることのない「東山」である。そこで「なぜ、東山と呼ばれているのだろう」と問いかけ、子ども（学生）を揺さぶり、問題意識を持たせたい。多くの場合、誰でもまず自分を基準として方位を考える。方位学習の第一歩は、ここから始まる。

他地域から通ってきている大学生の場合は、「東にあるから東山」というんだよ」と答えるし、地域に生活実感のある子どもたちは、この答えに付加して「おじいちゃんが言っていた。太陽が昇

るこっちが東、だから東山。太陽は東山から昇ってくる」と答える。

次いで、「では、学校から見て北はどっち？南は？西は？」と問いかけ、四方位をとらえさせる。ここで、方位の1つが分かると、四方位がすべて分かることに気づかせたい。この場合、自分の小学校（学生は鎌倉女子大学）が、「私にとっての方位の基準」となる。

○方位の教育的意義——どんな役に立つ？

学校現場では、「方位を覚えて、それでどうなんだ」という議論がある。役に立ってはじめて「知っておくと便利だ。活用できる」といえる。例えば本学の学生にとって便利な点は、

- ・「東山」が東だとすると、東・西・南・北がすべて分かる。＝最大のメリット
- ・「4-B教室」といっても分かりづらいが、「4階の北・東の教室」といえば「イトウヨーカドー側の東山側の教室」というように場所がイメージできる。
- ・大船駅の線路は、南、北に向いている。北の方角には横浜があり、さらにその先に東京がある。南の方角には、鎌倉市、南東方向には横須賀があり、その先は海である。また、西には藤沢市がある。このように、客観的で理解しやすい説明ができるようになる。
- ・では、東京の先には、どういうまちがあるのだろうか。横須賀の先の海は何という海だろう。このように、もっと先をイメージしていくと、地図理解につながる。大船という点が面となって広がっていく。日本地図の形成につながる。
- ・「大船観音は、どっちの方角を向いているのだろうか？なぜ、南東を向いているのだろうか？」というように、大船の本質に迫る新たな問題を生む契機にもなる。

尚、方位、地図記号が、平成23年度から実施の学習指導要領に明確に位置づけられていることを特記しておきたい。（「第2節社会、3内容の取り扱い(1)」）

②方位は相対的——横浜市栄区から見ても「東山」か？

大船や本学から見ると東山は東にあるが、横浜

市栄区から見ると東山は西になる。岩瀬から見ると、南の方角になる。方位とは、どこを基準とするかによって全く異なる。相対的なのである。しかし、横浜市栄区でも岩瀬でも、「東山」を西山とか南山とは呼ばない。どこでも「東山」と呼ぶ。つまり、固有名詞となっているのである。

③固有名詞化——方位の中心（基準地）はどこだったのか？大学か？

ここで、大学を方位の基準とする「大学から見て東にあるから東山になった」という当初の意識が揺らぎ始める。そして、「大学がまだ建っていなかった昔から、東山という地名はあったのか？」という次の疑問に突き当たる。もし、本学が建てられる以前から東山という地名があれば、本学が「東山」という固有名詞化の基準地ではないということになる。そこで、＜図2＞や＜図3＞などの古地図に当たらなければならない必然性が生ずる。

もちろん、大学が建つ前から東山という地名は存在する。現時点で筆者が調べた範囲では、大船の「東山」という固有名詞が初めて地図上に登場したのは、大正11年の「大船田園都市計画図」からである。前述の通り、国土地理院の地図には昔も今も記載されていないので、地域の人たちの言い習わしによって伝わってきたものと思われる⁽¹⁵⁾。

④方位の中心＝大船の中心——そもそも大船のヘソはどこだ？

多くの場合、方位の中心（基準地）は、その地域の中心である。役所があったり、駅があったり、街があったりする地でもある。したがって、そこを基準として付けられた地名（東・西・南・北や上・中・下、一・二・三、左・右など）は、大多数の地域住民の合意を得られやすい。さて、では「東山」を東とする大船の中心地は、どこであったのだろうか。すぐに脳裏に浮かぶのは、大船駅と松竹撮影所である。

まず大船駅から検討しよう。一般的に駅が地域の要衝になるのは、歴史的には街道の宿場町と関係がある。東海道の要衝は、大船近辺では「戸塚の宿」と「藤沢の宿」であった。「大船の宿」は

なかった。そもそも大船駅東口が開設されたのは、大正15年である。それまでは、ここは湿地帯であり、ぬかるみのひどいところであった⁽¹⁶⁾。それに、東山の名前が文献上に登場するのは、大正11年であるから、大船駅が方位の拠点になることは物理的にあり得ない。

大船撮影所はどうであろうか。同撮影所の建設が始まったのは昭和9年であり、完成は昭和11年である。これも、大船駅東口同様物理的にあり得ない。

では、一体どこが、大船の中心地であったのだろうか。ここで、もう一度、＜図2＞を見直してみよう。大船を内（内耕地）と外（外耕地）に分けていたのは、旧鎌倉街道であった。

しかも、江戸時代、大船は助郷村として、人馬の提供を戸塚宿に義務づけられている。当然、旧鎌倉街道は、人馬の往き来が盛んであったことが想像される。

旧鎌倉街道が、江戸時代に大船の中心であったことはこれで分かるが、南北八町（約872m）のさらにどの辺りであろうか。ここで、＜図3＞を見てみたい。夕陽丘のロータリーが田園都市構想の中心である。このすぐ南を走っているのが旧鎌倉街道である。そして、田園都市構想の中心的推進者、東京渡辺銀行・渡辺六郎が邸宅を建てたのがこの夕陽丘である。夕陽丘は、離山の北端にある腰山を削り、この土で周囲の田を埋め立てたものである⁽¹⁷⁾。

これらの事実を勘案すると、大船の中心地は、本学から200mほど西に行った松竹通り（旧さつき本通り）近辺（夕陽丘）ということになる。離山（腰山）である。筆者は、ここが、大船の方位の基準として、最有力地と推測する。そうだとすると、本学を方位の基準地としていたことには、それほど間違いはなかったことになる。

（2）小单元2 山蒼神社は、東山にあったか、離山にあったか。

①神社・寺を調べる＝地域調べの第一歩——山蒼神社の石碑には何が書かれているか？

「地域調べの第一歩は、神社・寺調べから始める」というのは、社会科教師にとってはセオリー

中のセオリーである。通常、人々が未開の地に開拓のために入植するときは、必ずと言っていいほど神社・寺を建てる。そして、開拓の成功を祈願する。神社・寺は、入植者たちの心の拠り所であるとともに、仲間同士が結束を保つための拠り所でもある。

また、無事収穫が終わったときには、神社に感謝の心をこめて御神輿を担ぎお祭りをを行う。

開拓が成功裡に一段落したときは、先人の功を忍び石碑を建立する。これは、先人の苦労を忘れずに後世に伝えようとする営みである。したがって、お祭りや石碑には、貴重な地域の情報がたくさん集積されている。子どもにも、神社・寺調べを必ずさせたい。

さて、山蒼神社の石碑に書かれていることの概要は、以下のとおりである。

○今世紀初頭、ある先覚が遠大な都市計画を目論み、この地一帯の開発に着手した。しかし、当初より災厄が続出し、事業を中断せざるを得なくなった。

<解説・筆者>1921（大正10）年、東京渡辺銀行専務取締役渡辺六郎が、田園都市構想のもと、大船の土地買収を開始し、翌年には埋め立てをして「さつき街区」の第一回売り出しを開始した。しかし、1923（大正12）年関東大震災が勃発し、火災や住宅の倒壊等の被害に遭う。

○1930（昭和5）年、稲荷大明神を神体とし、眺望絶佳樹木鬱蒼の丘に社殿を建て、山蒼稲荷神社と命名し、神体を祭った。以降事業のすべてが順調に進捗し、大船今日の発展の因を作った。

<解説・筆者>この間1927（昭和2）年東京渡辺銀行が営業停止し、翌1928（昭和3）年には破産宣言を受け、昭和の大恐慌の引き金となった。

○1934（昭和9）年、松竹蒲田撮影所の大船進出に併せ、現在地に社殿を遷した。

<解説・筆者>昭和57年11月3日、柗岡智撰（現大船中央病院初代院長）が中心になって移転を実行した。

②失敗体験の大切さー山蒼稲荷神社は、「東山」にあったのではないのか？

はじめ、「東山にあったのでは？」の予想のもと、現在の東山を調査する。しかし、東山の山頂に登ってみても、樹林が鬱蒼としているばかりで、

周りは樹木に遮られて何も見えない。「眺望絶佳」の石碑の文言とどうしても合致しない。

子どもにも、これと同じ体験を是非させたい。堂々巡りをしながら、いずれまた学習は東山に戻ってこなくてはならなくなるからである。この体験が、単元の後半で大きく役に立つ。

③歴史の事象が見えてくる——山蒼稲荷神社は、「離山」にあったのか？

地域の古老を訪ねて、山蒼稲荷神社について取材した。「浜ゆう」（松竹通り）の主人（90歳）から、次のような情報を得る。大正末から昭和の初めにかけて、離山（腰山）を崩した所に競馬場の観覧席が作られ、競馬を観覧したというものである。

そこで、改めて<図2>の地図を見ると、確かに本学の前にかつて離山（腰山）が存在した。調べてみると、「皆芝山ニテ樹木ヲ生ゼズ」（相模風土記）とある。しかも、「山頂には鈴木稲荷が建立されていたという」⁽¹⁸⁾。山蒼稲荷神社が、この鈴木稲荷神社と同一のものであれば、山蒼稲荷神社が離山にあったという説は俄に信憑性を持ってくる。とはいえ、疑問も生ずる。確かに「眺望絶佳」ではあるが、「樹木鬱蒼の丘」が合致しない。

浜ゆうの主人は、次のような情報もくれた。かつて、「大船中央病院の向かいの山に祠があり、そこから当時の院長の柗岡先生が祠を遷した」というものである。また、山蒼神社は、「渡辺家の自家奉祀」の神社であったという。

同じ趣旨のことは、地域歴史研究家S氏が、「山蒼神社は、渡辺家の守り神であり、神社としての学問的価値はほとんどないといっている。ただし、年1回、大船地区の人たちは、山蒼神社の御神輿で祭りを行っている」と語っていたことと合致する。ちなみに、平成20年度のお祭りは、8月23日、24日の両日に行われている。

ところで、筆者は、山蒼神社が学問的には価値が低いとしても、子どもが体験的な問題解決活動を行いながら、故郷意識を育てる上での教育的価値は高いと考えている。

④再び、東山へ——地域の人の複数の証言から

山蒼稲荷神社の存在を求めて、多くの地域の人々

に話を聞いた。地域の人たちは、そのことならあ
の人が詳しいと、次々と適当な人を紹介してくれ
た。以下、いくつかを紹介したい。

○浜ゆうのご主人と奥さんの話

「枅岡さんは、決して、山蒼神社がどこにあっ
たかを話そうとしなかった。でも、山に祠があり
そこからおろしてきたとは、聞いたことがある。
三菱電機の向かいだと聞いている」

○大久保安夫田園町内会会長の話（かつて、松竹
映画に勤務）

「山蒼神社は、東山から下ろしてきたらしい。
（現在の東山南端を指さしながら）あのあたりに
あったらしい」

○また、「大船田園都市を学ぶフォーラム第2部」
の中で、渡辺六郎の長男渡辺秀は、概略次のよ
うに述べる。（「幻の田園都市から松竹映画都市
へ」p.90による。）

①渡辺邸宅は、現在の山蒼神社一帯にあった。②
六郎が大船へ来たときに、上野の花園神社から渡
辺家の氏神として分けてもらった。③田園には、
当時神様がいなかったの、昭和10年から12年く
らいに母が提案して田園の方に（遷して）祀った。

※石碑は、昭和9年と記述。

以上の地域の人たちとの交流と現地調査、フォー
ラムをとおして、ほぼ結論と言えることは、
ア、元々の「東山」は、現在の東山のはぼ3倍く
らいあったこと。

イ、「眺望絶佳の丘」が、＜図4＞のAの部分で
あり、この奥まった平坦部に山蒼稲荷神社があっ
た。

ウ、「樹木鬱蒼」の部分はAから北側の部分であ
り、これには現存している東山も含まれる。

子どもたちにも、是非こうした地域の人たちと
の交流を実現させたい。社会参加である。そして、
身近な地域の人たちとの交流は、必ず子どもたち
の心の中に大船という地域環境を守り育て、受け
継いでいこうとする「故郷意識」を育てていくは
ずである。

註

（1）文部省（現文科省）『中学校学習指導要領解説社会

編、平成11年版、平成16年5月一部補訂』2004年、
p.42

文科省は、中学校では「規模の異なる地域の例と
して「身近な地域」、「都道府県」、「世界の国々」の
三つを取り上げた。」と記述している。小学校では、
「自分たちの住んでいる身近な地域や市（区・町・村）」
（2内容（1））と記述し、「身近な地域とは、自分た
ちが通う学校の周りの地域」（同上解説）とする。本
稿においては、「身近な地域」を小学校の分類にもと
づいて使用した。

（2）文部省（同上）『小学校学習指導要領解説社会編、
平成11年版』1999年、p.147

学習指導要領から「郷土」という用語が消え「身
近な地域」に改められたのは、小学校が1968年、中
学校が1969年版学習指導要領からである。その理由
は、次の三点である。①「郷土」という概念には曖昧
さがある。②「郷土」とは、現に子どもたちが生活し
ている地域であるから、率直に「身近な地域」とし
た方がより実態に即している。③「郷土」そのものの
理解は、内容が膨大であり、過剰になりがちである。

（3）山根一晃他「野外教育施設（東山ピオトープ）を
活用した保育者養成に関する研究」『鎌倉女子大学学
術研究所報』第8号、2008年 p.88

（4）加藤章「4 歴史教育と地域」、『地域に学ぶ社会科
教育』（朝倉隆太郎編著、東洋館出版社、平成元年）
p.32

（5）「1 地域と地域学習の本質」朝倉隆太郎、『地域に
学ぶ社会科教育』（朝倉隆太郎編著、東洋館出版社、
平成元年）p. 7、p. 9

（6）故郷意識は、環境意識とつながる。大船の桜を守
る会の人たち、烏山用水（相模原市）を保存し守る
人たち、読書院と耕余塾そして小笠原東洋を守る人
たち（藤沢市）、荻窪用水と川口広蔵を守る人たち
（小田原市）、袋井用水を守る会の人たち（徳島市）
等を見てきた。いずれも故郷をこよなく愛し、守り
伝えようとする地域の人たちである。強く故郷意識
の働いている人たちともいえる。故郷意識を育てる
ことは、地についた環境を保護する現代的な運動で
あると考える。

（7）文部省（同上）『小学校学習指導要領解説社会編、
平成11年版』1999年、p.147～149

- (8) 拙著『発信型の新しい問題解決学習』1999年 p.15～26「子どもはどこまで追究するか」参照。
- (9) 離山については、現在の大船郵便局を北端とし、大船中学校の近くが南端であったことが分かっている。その痕跡は、三菱電機情報技術総合研究所の構内に今も残っている。
- (10) 北鎌倉台土地区画整理組合『大船の歴史』2006年 p.1
- (11) 同上、p.20
- (12) 鎌倉市中央図書館近代史資料室編『幻の田園都市から松竹映画都市へ』2005年、p.61
ここに『日本地理大系』に掲載された「大船田園都市遠望（昭和4年頃）」という「東山」の地名入りの写真が載っている。この写真から、元々あった東山の姿が分かる。
- (13) 同上、p.44。尚く図4は、同じ手法を使って、筆者が、平成10年10月1日国土地理院発行の「1万分の1地形図大船」に「新鎌倉平面図」を重ね合わせたものである。
- (14) 鎌倉市中央図書館近代史資料室編『幻の田園都市から松竹映画都市へ』2005年、p.44
尚、「さつき本通りが現在のように松竹通りになったのは、地域住民が鎌倉市に申し出て認められた」（大久保安夫談）ことによるものである。
- (15) 地域調査では、例えば「浜ゆう」のご主人（90歳、平成20年6月現在）は、「日の出を見るのに東山を基準にした。特に初日の出を拝むときは、必ず東山から探した」と述べている。
- (16) 佐藤邦雄『私たちの故郷“岩瀬町の歴史あれこれ、岩瀬公会堂落成記念セミナー』2008年、p.16
大正11年3月、大船駅周辺（現東口）で第一期埋め立て工事開始。埋め立て土砂は、大船村腰山・長山・地藏山、東山を切り崩して行う。その後、この地を大船田園都市（新鎌倉）として売り出す。
- (17)(18) 北鎌倉台土地区画整理組合『大船の歴史』2006年 p.90

した問題解決的な活動に取り組む。その問題解決活動の中で、教師は、子どもたちにこれまで培ってきた「思考力・判断力・表現力等」の能力を活用し、さらにいっそうのこれら能力の向上を図るという主旨である。本稿では、こうした考えを元に、現代世界の喫緊の課題となっている「地球環境の持続的発展」を目指すべき最終目標として設定し、本学の地元である大船の教材化を試みた。「地元」というのは「身近な地域」である。そして、大船を愛する「故郷意識」の育成が、学習の核として必要であると考えた。これまで、身近な地域である大船についてはあまり詳しい研究がなされてきたとは言い難い。本稿では、大船を地元として想定し、子どもの問題解決活動をとおした身近な地域学習の在り方を探った。この問題解決のために、地元の人たち始め多くの人の知恵を借りたが、実際は難解を極め、不十分な調査結果に終わっている。また、「風景としては横浜方向へ展開するよりは玉縄方向へ向かうのが昔も今も地元（大船地域）の目線だと思います」という指摘ももらった。そのため、この論文の続編として、玉縄から見た東山を今後調査研究したいと考えている。

(2008.10.23受稿)

要旨

新しい学力が、学校教育法及び学習指導要領で示された。子どもたちの「主体的に学習に取り組む態度」をバネにし、授業では「習得—活用—探究」を柱と